

# 都留市史 通史編

## 第三節 御正体山と妙心

結伽趺座 「このミイラの特徴は、座禅合掌の姿をとり、胸腹部、背部はよく保存せられ、セキ柱はごく自のミイラ。然にゆるやかなS字形に曲り、左デン部陰部の損傷により著しく前屈しているが、背部一面、胸部上方は白色ミイラ化、下方部分はアメ色となり、とくに腹部、足にはシワが多い。頭部はよく保存され、黒褐色でところどころに二センチメートルほどの毛髪が生えており、内蔵は全くなく体内は空廻となっているのに、珍しいことは腐りやすい眼球が左右とも乾燥、萎縮しながらドウ孔の跡あざやかに残つていていた。これらの特徴中、S字わん曲も棺中で座禅の疲労に堪えながら往生した結果であり、そのため血液が下がって上部が白色、下部がアメ色となり足がてん足様になっている点は、死後納棺の場合は起こり得ない現象で、生前からの長時間の座禅によりそのまま往生したことが立証された。

死因は、骨の萎縮軟部組織の状態などから明らかに飢餓死であり、断食の事実を裏付け、年齢は知歯の状態、ロク軟骨の化石、骨柱形成の軽度の発現から三十五歳から四十歳と判定でき、行年三十七との寺伝に相違ないと結論された。」(『中日新聞』一九五〇年五月二六日付、中野八吾『御正体山とお上人』を参照)

一九五〇年五月、名古屋大学医学部の調査団が調査したミイラは、現在、岐阜県揖斐郡谷汲村の両界山横藏寺に安置されている。結伽趺座するそのミイラこそ、富士講の行者で、修驗本山派に属した信州善光寺の弟子でもあった妙心の即身仏である。彼は、文化一二年(一八一五)四月、御正体山において法皇をとげている。時に三七

歳。当市域の鹿留・開地に跨る御正体山は、海拔一六八一・五五メートルに及ぶ雄峰であり、御正体大権現の鎮座する古くからの靈山だが、世上よく知られるようになつたのは、文化二一年（一六四）七月、富士の大行者妙心が「開山」してからである。

妙心は、安永八年（一七七八）一一月一日、美濃国大野郡神原之庄（岐阜県揖斐郡谷汲村）に生まれた。幼名は熊吉。美濃の戦国武将斎藤龍興の家臣古野權之丞の子孫といわれる。九歳の春、仏の道を志し、聖護院宮内正行院の弟子となるが、一時、故郷の横蔵寺に移る。享和元年（一八〇）、改めて信州善光寺大勧進別当亮寛の弟子となり、これより妙心を名乗つてゐる。

師の許しを得た妙心が、日本国中の神社仏閣・靈地靈山への参籠や、立行・断食行などの修行の旅にてたのは、その後間もなくのことであった。善光寺を出立、抖擞行脚の身となつた彼は、文化一〇年（一八三）六月、富士吉田口より富士山に登山、いつたんはここを修行の場と定めている。ところが、文化二一年（一八四）七月にいたり、「靈夢」に導かれた彼は、富士山の丑寅の位置に聳える「鹿留山」（この場合は御正体山を指す。現在、鹿留山と御正体山とは別の山とされるが、元来、いわゆる「鹿留山」の範囲は広く、御正体山をも包含していたようだ）を「開起」し、翌二年四月二十四日、ここで即身成仏の大願を果たしている（以上、中野氏前掲書、近世IIによる）。

**ふたつの由来** ところで、これまでの御正体山と妙心のイメージは、おおよそ厳かな信仰の山、ストイックな書と鹿留村 山岳修行者というものであろう。なるほど、それは事実の一面をついてはいるが、御正体山および妙心の全体像は、それだけでは語りつくせるものではない。山元の鹿留村と村人の存在をも視野に入れる時、また違つたイメージが浮かび上がつてくるのである。

これまでに描かれてきた妙心入滅までのストーリーは、天保二年（一八四）に御正体山第三代上人巨戒が認められた「甲州都留郡御正体山御縁起之巻」（鹿留御正体権現神社氏子總代保管。以下、「縁起」と略称）に、その多くを依拠してきた（例えは中野氏前掲書）。しかし、当市史の史料調査の過程で、巨戒の「縁起」よりも古い由来書が発見された。『資料編近世II』に全文紹介した文政四年（一八二）「甲斐国都留郡鹿留村梵行院妙心御由来」（近世II六六三。以下「由来」と略称）がそれである。「由来」を作成したのは鹿留村梵行院講中であり、同講は生前の妙心に直かに接した人びとであった。一修行者巨戒の「縁起」と鹿留村講中の「由来」（以下、この両者をあわせ称する際は、由来書と表記する）の基本的な話の流れは共通しているものの、若干の相違点が認められる。

もとより由来書や由緒書などの資料は、描写対象となる人物や組織を権威づけたり、神秘化したりする性格をもち、記述内容には荒唐無稽なものが多い。それゆえ、由緒書の記述は、それ自体を事実として扱うわけにはいかない。とはいへ、由緒書が書かれたことは事実だし、記述内容が全て虚偽というわけでもない。そこで問題とすべきなのは、どんな動機・理由で由来書を作成したのか、そして何のために虚実取り混ぜた記述をしたのか、であろう。こうした資料の性質、問題点を踏まえ、ふたつの妙心由来書を比較してみると、いくつかの相違点が見出されるのであり、そこに御正体山と妙心の眞実も隠されているように思われる。何はともあれ、相違点をいくつか挙げてみよう。

第一点は、妙心が「開山」を決意した時期である。まず天保期に作成した巨戒の「縁起」によれば、信州の善光寺を出て富士の行者となつた妙心は、人穴での修行中にみた「靈夢」に導かれ、はじめて鹿留山の開起を決意したことになっている。一方、文政期の鹿留村梵行院講中の「由来」では、故郷の美濃を離れ、信州善光寺の弟子になつたころ、妙心はすでに「一山を開起してあまねく末世の衆生をさいど」するという大願を抱いてゐる。

第二点は、即身成仏を決意した時期である。「縁起」によると妙心は、「捨身命心願の大行」を決意して富士山に登山していた。つまり妙心は、富士の行者として、富士山で身命を捨てる覚悟だったことになつておる、一山開起の決意が富士入山後の変更だった点と矛盾しない。これにたいして「由来」は、富士修行中の妙心が、即身成仏の心願を抱いていたのかどうか明示的に記していない。当初より一山の開起を志していたとする「由来」では、少なくとも妙心が富士山で入滅しようと考えるはずもない。

そして第三点は、妙心にとっての富士修行の位置付けである。これはいうまでもなく、第一・二点とも密接にかかわる問題である。妙心の富士行者としてのイメージを強く打ち出す「縁起」では、のちの御正体山での大行に比べ富士修行を詳細に描いている。たいする「由来」の描写は、「縁起」と逆に、御正体山での大行にこそ重点がある。つまり、「由来」あるいはそれを作成した講中の認識では、妙心の富士修行は重要ではあるが、結局、鹿留山開起にいたる通過点にすぎなかつたのである。

最後に、鹿留山開起にあたり尽力した鹿留村については、明確な記述の相違があることを指摘しておこう。すなわち「縁起」では、妙心が鹿留山を開くに際して、鹿留村が果した役割に一切言及していない。ところが、同村が書いた「由来」では、当然ながら、村人が妙心を鹿留山に案内したり、同山の道作りをしたことについて記している。

ふたつの由来書の細部にまで目を凝らせば、まだ多くの相違点を見出すことはできそうだが、ここではさしあたり右の四点に着目しておきたい。いずれの記述がより正確であるのか確かめる術はないが、それにしても何故こうした違いが生じたのであらうか。以下に述べることになるが、ここには梵行院講中＝鹿留村の狙いが隠されているように思われるるのである。

### 「開山」の仕掛け

文化一〇年（一八二三）の八月末もしくは九月の初めころ、富士講の開山と仰がれる長谷川角行が修行したといわれる富士人穴にて断食修行に勤しんでいた妙心が、不意の眠気を催した際、「山靈」（「縁起」では「山靈」ではなく「齡八旬ばかりの白髪」となつている）が忽然と姿を現すや、次のように告げた。

「富士の西北、御正体大権現の鎮座する鹿留山を開起せよ」

彼はこの「靈夢」にしたがい、鹿留村の人びとを説得し、鹿留山（御正体山）に道を作ったといふ。

ただ、注意しなければならないのは、御正体大権現の鎮座するという靈山鹿留山の登拝道は、この時期には既に付けられていたことである。とすれば、「由来」に記された「開起」とか、「道ぎりひらき」・「道を作る」とは、いったい何を意味しているのか。

ここで注目しておきたいのは、この時期における富士講や富士登拝の流行現象である。一九世紀初頭（文化）文政）の富士講は、「江戸八百講」と諷れるほどの隆盛を迎えており、とりわけ関東一円の民衆の中には深く浸透していた。幕府はこうした講の団結力と拡大性を恐れ、たびたび信仰の禁止・弾圧の町触をだしたがほとんど効果はなかつたといわれる（岩科小一郎『富士講の歴史』）。

富士講の隆盛期に御正体山を開起した妙心は、信州善光寺大勧進僧都から、阿弥陀如来一体、金色札、由緒ある伝来の袈裟、そのほか証文・折紙付きで種々のものを拝領した。こうして善光寺の権威を身に纏つた妙心は、富士修行中に知己となつた関東筋の富士講信者らを訪ね、富士山の西北を守護し靈験あらたかな御正体山への登拝を、精力的に勧誘したのである。

さらに入山中の彼は、滝水・水行・立行など人間技とも思えぬ修行の様子を衆人に公開し、病人や「狐付」

客の大きな流れの中途に、矢印Bのような御正体山迂回コースを作り出したのである。鹿留山に「道ぎりひらく」ことは、誰でも登山できるような道を整備し、大きな消費力を有した参詣人を新たなコースに誘導する行為であった。これは鹿留村や近隣村々の信仰と経済の一體的な活性化を狙った、いわば「村おこし」ともいえる戦略であり、その結果、「山谷村内に市を成」した。さらにいえば、鹿留村講中作成の「由来」は、各地の富士講中にたいし御正体山参詣人に妙心と御正体山の靈験を説くパンフレット同様のものであり、宣伝効果が期待されていたのではないか。もしそうであれば、同書の記述が、妙心の富士山修行を軽視し、御正体山をめぐる活動やそれをサポートする鹿留村に重点が置かれているのも理解できる。

一方、富士講隆盛の時期、多数の富士行者のひとりであった妙心は、こうした鹿留村の人々と手を携えることで、はじめて一山「開起」の大望を成就できたのである。もし、鹿留山（御正体山）の登山道を整備し、妙心の靈力を喧伝した村人たちとの協力関係がなければ、彼は「開山上人」たりえなかつたに違いない。

以上に述べたことは、資料的制約が大きく、仮説の域をでるものではない。しかし、前項で示したふたつの由来書の相違点や鹿留村や妙心の行動は、右のように考へることによつて素直に理解できるのである。いかがであるか。

山の一大イベントさて、公開の場で修行に取り組んだ妙心が、最後の仕上げとしたのは、いうまでもなく即妙心入滅身成仏であった。これもまた、他の修行同様に、衆人注視のなか実現したのである。

文化一二年（一八二五）四月一七日以来、妙心は厨子に籠り、無言断食の大行に入った。以前から彼は、六世紀後半に天台教学を大成した中国隋の智顥の命日にあたる四月二十四日未の刻に往生をとげるだろう、と述べていたから、当日の参詣人はおよそ五〇〇人にもものぼつたという。

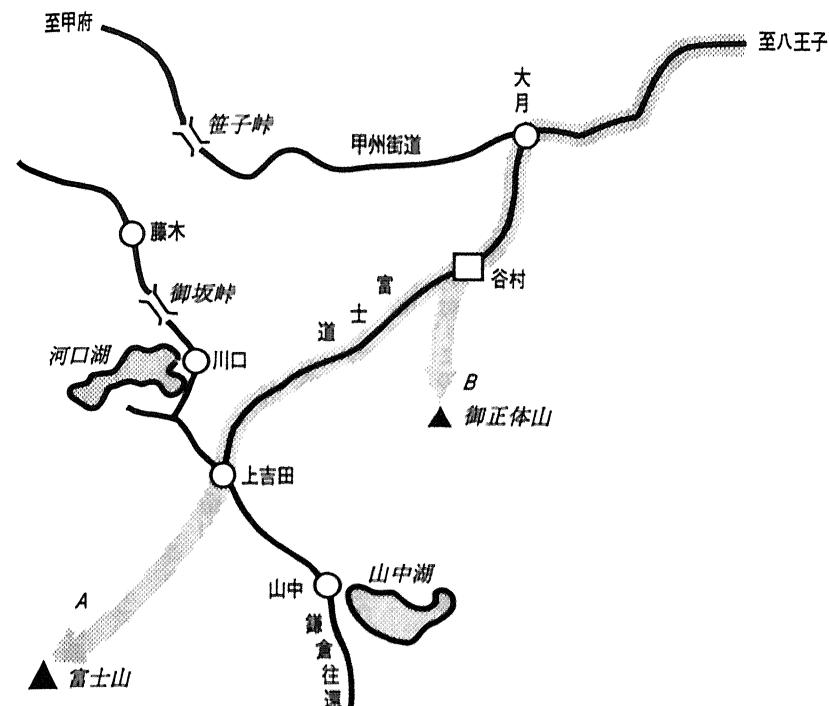


図5-2 御正体山「開山」後の登拝コース

「壁」「盲目」などに加持祈祷をほどこすなど、信者獲得に力を注いだ。一方、鹿留村をはじめ近隣の人びとも、妙心の加持祈祷の威力は凄まじく、病ある者はたちどころに平癒したと人々に噂したから、妙心の靈験を伝え聞いた人びとが、われもわれもと参籠し、その数は三〇〇人、五〇〇人、一〇〇〇人へと膨れあがつていったという。妙心詣での様子は、「山谷村内に市を成事、蠟蠟之ゑじきもとむるか如シ」といわれるほどであった。

このような状況を踏まえれば、既に登拝道のあった鹿留山に、改めて「道ぎりひら」いた意味は、自ずと明らかになつてくるだろう。すなわち、鹿留村と妙心は、当時の図五-2の矢印Aのごとき関東筋を中心とした富士登拝のとき、関東筋を中心とした富士登拝

未の刻にさしかかる頃、菊池源藏ら介抱人から時を告げられた妙心は、厨子の扉を開くと、「われ此処に入定して、諸国人の人をミちひかん、さて各々かた、わが入滅の今日只今、此處へ参詣せらるゝ事、一方ならぬちぐふの縁、其人々のすへまでも、ミらい永々まもるへし」と今生の暇を述べ、再び厨子の中へと消えた。はたせるかな、多くの人びとの見守るなか、妙心は入滅の大願を成就したのである。この時、鹿留村世話人講中や参詣人は、妙心の読経の声が絶えだえになるのを聞きながら、声をあげて泣き叫んだという。

信仰心のない者からみれば、その様子は人が自ら餓死しようとする瞬間を見物することにほかならない。しかし、当時の人のびと、とりわけ参詣人にとっては、妙心の入滅は極めて厳肅な瞬間であり、行者の入滅に何らかの救済や現世利益の厚い期待を寄せていたにちがいない。鹿留村講中は、こうした人びとと自らの信仰心に支えられ、妙心入滅という山の一大イベントを成功裡に終了したのであった。

その後の鹿留村講中が妙心の入滅をすぐさま信濃善光寺に報告すると、同寺は妙心にたいし「梵行院妙心」御正体山 という尊号を讐<sup>くわ</sup>つた。その後、靈験あらたかな御正体山と妙心上人の宣伝広告のごときものまで出現している（近世II六四）。

#### 御正體大權現之

御山入たまふて入定ありし、其徳廣大ニして、世の人帰依シ、思ひなし參詣日夜ニ絶る事なく、願もふ御利益あらせたまひ事、鏡にうつすかことく、(已カ)三拾七才春、星霜ふるといえとも、その正躰金剛堅固にして、

正躰之活如來とあかめ奉る

御信心し御方不限多少ニ御心さし建、成就いたし<sup>マニ</sup>へし、一粒万倍一滴万水の御利益あり、子孫繁榮・福寿増長なる事疑なし

この廣告目的と思われる文書は幕末に書かれたものであろうか。即身成仏した梵行院妙心は、御正体山の活如來として、より熱心な信仰をあつめた。「あまねく末世の衆生をさいど」したいといふ生前の妙心の願望とは別に、絶大な現世利益をもつて知られた御正体山には、一〇〇人、一〇〇人、一〇〇〇人にもおよぶ願かけの参詣人が大挙して登拝した、と「由来」は記している。妙心の求道心、人びとの信仰心を背景に、鹿留村はにわかに賑やかな村と化したのである。第四章に述べられているように、明治時代初期の鹿留村には、升酒商・菓子商・豆腐商・綿紬商などの商店が多く軒を連ね、その様相は都市的でさえあつたという（近世II四八八）。まさに「山谷村内に市を成」すにいたつたのである。

しかし、御正体山と鹿留村の賑わいも、明治元年（一八六八）の神仏分離令、同五年（一八七〇）の修驗宗廃止の布告などを機とする富士講・富士信仰の変容・衰退とともに、その活気はしだいに失われていった。人びとの信仰がなければ、即身仏も単なるミイラにすぎない。妙心のミイラは、修驗宗廃止の影響で邪魔ものあつかいされたり、文字通りの見世物にされるようになつたため、山梨県が病理研究の資料として引き上げてしまつたという。そして、妙心の生地である岐阜県の関係者からの請願があると、県はこれをあつさりと承諾、横蔵寺に安置されて現在にいたつている（中野氏前掲書）。